

## 「おざわ歯科」の建築について

長坂 大

### 略歴

'82 京都工芸繊維大学工学部住環境学科卒業  
'82-'84 松永蔵・都市建築研究所勤務  
'85-'89 アトリエ・ファイ建築研究所勤務  
'89-'03 京都工芸繊維大学 工学部造形工学科 助手  
'90 株式会社メガ 設立  
'03-'08 奈良女子大学 生活環境学部人間環境学科 助教授  
'08- 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 教授



訪れる人々がゆったりとした時間を過ごせるように。  
この建築の設計理念です。

凡庸なたとえかもしれませんが、それは、西欧の田舎の小さなリゾートホテルを訪れたときのような感じです。感じのよいスタッフが出迎えてくれたロビーは、豪華ではないけれど趣味のよい調度品が置かれ、窓からは木々の緑、光の移ろいを感じられるといったようなものです。

「おざわ歯科」では、空間全体をそのようなイメージでまとめ、そこに高度な医療機能がさりげなく用意されているという関係が望ましいと考えました。

建築が構造性能や、医院建築としての医療環境を備えていることは当然のことです。しかしそれを積極的に建物の全体イメージとして表現するかどうかは設計上の選択です。多くの病院建築が、医療環境として大切な「清潔さ」を表現するために白という色彩を採用していますが、ここでは、小沢先生と相談してそういう方針は採用しませんでした。歯の治療に不安を覚えている人に治療技術をアピールするよりも、もっと別の何か、気分を変えられるような空間を提供しようと考えたのです。

玄関に入って気持ちのいい時間を過ごしているうちにいつのまにか歯もよくなってしまふ、というのは、極端ですが理想的なシナリオではない

でしょうか。

これを実現するために、周辺環境との関係は重要でした。

まず、敷地周辺の住宅地、アパート、斜面の町並み、幹線道路、河川等に対して、「おざわ歯科」は別の世界であるという構えを示すことにしました。この場所の周辺環境は、「ゆったりとした時間を過ごす」にはやや煩雑だからです。壁が多い外観になっているのはそのためです。

次に、そうして生み出された内側の空間に3つの庭をもうけました。内に向かって閉塞的になるのではなく、自然の光を取り入れ、庭の景色を楽しめるように窓を開くためです。

3つめは、そのようにしてできた建物が逆に周辺環境に対して拒絶的にならないように検討しました。建物を分節して大きなかたまりになることを避け、周辺住宅地への圧迫感に配慮しています。

別の言い方をしますと、既存建築群に対する新しい群造形の可能性を探求する、といったところでしょうか。大きさや形では、周囲に同調的な姿勢をとりつつ、窓や屋根といった建築要素各部の詳細設計と外装材の取り扱いにおいて周囲とは異なる表現となっています。

建築は環境の一部です。「おざわ歯科」が優れた医療の場であることに加え、望ましい地域環境の一部となることは設計者の願いです。